

脇田重雄さんの思い出

林 俊雄*

Memory of WAKITA Shigeo

Toshio HAYASHI

脇田重雄さんが亡くなった。脇田さんとは1970年代末から90年代初めにかけて、古代オリエント博物館で職場をともにした。その後、職場は変わってしまったが、脇田さんと最初に行ったイラン・シリアの海外調査のことなど、思い出を記してみたい。

脇田さんは、男ばかりの9人兄弟の末っ子である。生まれたのは昭和22年、終戦直後で食糧確保が最大の関心事であった。発掘調査でも最大の楽しみは食事である。食事が全員に平等に行き渡るように、脇田さんは常に心配りを怠らなかった。食事だけでなく、すべての面においてみずからしゃしゃり出るのではなく、縁の下の力持ちとして影に回る存在だった。そう言えば、学生時代、脇田さんはラグビーのプロップというポジションを受け持っていた。プロップとは「支柱」という意味である。

一方、脇田夫人の道子さんは5人兄弟の長女で、何事につけ積極果敢であり、速攻即決、竹を割ったような性格である。この2人が夫婦となるのだから、世の中面白い。結婚の許しを得ようと脇田さんが恐る恐る道子さんの父親のもとを訪ねると、「えっ、本当かい、大丈夫かい？」と、念を押されたという。

結婚直後、2人は京王線の烏山の駅に近い都営住宅に入居した。緑の多い、やや古い団地だった。まだ脇田さんは早稲田の大学院生、道子さんは就職直後だったか、いずれにしても無収入に近い状態だったため、簡単に都営住宅に入れたのであろう。2Kと狭く、風呂もなかったが、ベランダに小さい浴槽を置いていた。住めば都、脇田さんはこの環境を大いに気に入っていた。

1977年のイランは、天国のようなところであった。とりわけ発掘開始前一週間、ぼくと脇田さん2人だけで、親切的な食事付き民宿のようなところに泊まり込み、周辺を訪ね歩いて、オアシスの雰囲気を楽しんだ。M先生が来てからも、ジンは飲むが悪酔いはせず、楽しい毎日だった。発掘の終盤、ぼくはひどい下痢に悩まされ、仕事はすべて脇田さんに任せてしまい、大変申し訳なく思っている。

体調が回復してからは、I先生とともにカスピ海沿岸の遺跡を巡検し、一足先にシリアに入って発掘の準備をした。この間にもニッサンパトロールでシリア北

部の遺跡の巡検をすることができ、脇田さんにはイランでの図面整理など、厄介な仕事を押し付ける結果となってしまった。

シリアでの発掘には京都の川西さんや福岡県の方々も加わり、ビッグトレンチも入れて順調に進んでいたが、軍資金を運んでくるはずの江上先生がペイルートで骨董品を買ったために資金が尽きてしまい、発掘が続けられなくなってしまった。作業員は全員解雇、発掘は店仕舞い。それまでタバコは洋もくのケントを吸っていたものが、地元のハムラに代わり、それもシリアの安いシャルクへと落ち、最後はタバコの葉をバラで買い薄い紙で巻く仕儀にまでなってしまった。ちなみにあれは結構こつがいり、最後に紙の端をなめて唾をつけ、丸めるのであるが、ぼくはたくさん葉を詰めることができず、2、3服吸うともうなくなってしまった。

何とか調査を終え、ぼくはトルコ旅行に向かい、他のメンバーは全員帰国した。1か月後ぼくが帰国すると、脇田さんは引っ越していた。彼がシリアにいた間に、道子さんが決めてしまったのだ。調布近くのマンションで、多摩川の近くだという。烏山からは少し遠くなるが、川べりをジョギングすれば気持ちがよく、健康にもよいと言って、脇田さん自身も大いに気に入っていた。

翌年、再びぼくは脇田さんとともに、シリア調査に参加した。帰国すると、道子さんはまたもや引っ越し



夜明けのタペ・サンゲ・チャハマック遺跡に立つ脇田重雄氏（右）、左は岩崎卓也氏（1977年、イランにて）

ていた。今度は川は川でも下町の隅田川に面した、箱崎町の近くである。道子さんの勤務先は旅行会社の西遊旅行で、道子さんは超売れっ子の添乗員なのだ。その頃ツアーは、箱崎町にある東京シティ・エアターミナルが集合地点であった。道子さんはそこに目を付けたのである。

これまでのところとはだいぶ環境が違うが、きっぷがいい飲み屋などが多く、下町の人情も脇田さんの気持ちにぴったりと合っていた。この後も引っ越しはしたが、この近辺をはなれることはなかった。

脇田さんはどんな境遇にもひるむことなく適応し、あまり表に出ることはせず、背中で語ることできる男だった。合掌。

以下に脇田さんが研究代表を務めた科研費の研究課題を示す。

2004～2006 年度「シリアにおける都市文明の展開に関する考古学的研究」基盤研究 (B)

2003～2004 年度「シリア出土資料のコンピュータトレースによるデータベース化」基盤研究 (C)

1999～2001 年度「シリアにおける都市文明の形成と展開」基盤研究 (C)

1996～1997 年度「シリアの青銅器・鉄器時代における出土遺物の比較研究」基盤研究 (C)

1993～1995 年度「シリアにおける都市文明の展開」国際学術研究